

一月の最終週、氷点下六度にふるえるウィーンを訪ねた。もっとも「冷えた」のはボクだけでウィーンっ子たちは平気の平左。日本でも寒さが当たり前の地域では備えも万全で家の中は暖かい。ウィーンでだって外に出る時だけ用心すれば、ホテルも美術館もコンサートホールも無論オペラ座も全く快適だ。そして何よりうれしきことに音楽やオペラの演(だ)しものはいつもと変わらず、世界一流が集まっているうえに、観光客、ことに日本からのそれが少ない。

出かける直前まで風邪を

ひいていたボクだがウィーン滞在中は無事、帰国して再び点滴の世話になったのだからよほど向こうの方が居心地がいいということか。

着いた日の翌日、まずはコーヒートケーキで一息入れようと目抜きケルンテナー通り入り口、ホテル・ザツハに向かう途中、国立歌劇場の前を通ると、黒い弔旗が垂れ下がっていた。はて、と思ったが何もない。当たらず、そのまま喫茶室でインシユペナー(ウィーン

の典型的なコーヒードが、ここではウィンナーコーヒートという言い方はしない)と銘菓ザツハトルテを

注文する。たっぷり生クリームが盛り上がり、おいしい水と一緒にサーブされる。またウィーンへやって来たという実感がジワリわいてくる。ウィーンの水は実に美味(おいしい)。アルプスの山あいから引いている冷たい水道水がそのまま飲めるという幸せはこだけだ。ザツハはぐっと甘みを抑えたチョコレート

るほど激しい。今年一月発足したユーロ経済の影響だ。貨幣として出るのは三年後だが銀行のユーロ決済取引が始まると、レストランのメニュー価格などたちまちオーストリア・シリングと併記され物価も去年より上がった。日本で一番新しいパンフレットに載っている情報もこの変化には間に合わない。七十二時間有効フリーパスが二五%値上げ、百五十シリングになっていたのには驚いた。

さてやはり、弔旗は国立歌劇場関係だった、と分かったのはその夜、モーツァルトのオペラ『魔笛』をみるため再びここへ来たとき

## ウィーンの弔旗と黙祷

岡田 寛



だ。ここでは歌劇の演目ごとと期間中(九月から翌年六月まで)販売しているパンフレットがあり、それに当夜の出演者や裏方一覧表が添付されているが、この夜はもう一枚あって「アウグスト・エウエルディングの死を悼む」。周知の通りオペラはオーケストラピットに指揮者が登場して始まるが、当夜はすぐに国立歌劇場ディレクターのヨアン・ホレンダーが舞台上に登場して弔辞を述べ全員登壇して黙祷(もくとう)がこれに続いた。エウエルディングはプロデューサーや演出家として貢献、その死は大きな芸術的損失だろうがボクの記憶にはな

い。レギッサーという独語が英語のレジスタラーとは違い舞台監督のことだと分かったのは、帰国して独語に強い友人にたずねた結果。インターネット上のヒットで一九八三年バイエルン国立歌劇場でサバリッシュ指揮の「魔笛」をエウエルディングが演出したことを知ったのも彼のおかげだ。それにしても日本では劇場の弔旗掲揚、黙祷の例は知らない。それだけプロデューサー、つまりは裏方が高く評価される芸術文化の奥深さなのだろう、と実感したとこだ。

(音楽評論家)

## 石の

### 避暑

古くは菅原道真が讃岐国司として赴任した綾南町瀧宮。町の北部にある北条池のほとりに、シルクハット風の石帽子をかぶった風変わりな地蔵が立っている。高さ一〇・八尺、幅二尺、このお地蔵さんを「帽子地蔵」と呼び、慕っ

## 帽子地蔵

(綾南町)